学校で教えるべき!?

《「学校で教えるべき」》

◆　SNSの問題点を扱ったある記事の中に，「SNSによって社会的に不利益が生じたケースなどが現実に多く起きていること，これは大事なことで，SNSなどで人を傷つけるのは良くないと学校で教えることが必要なことだ。」という趣旨のことがありました。また，テレビ番組においても，コメンテイター類の人の「こんな大事なこと知らないというのは，学校では教えていないのでしょうか・・？」とか「こんな大事なことは，学校できちんと教えるべきだ！」とかの発言に接することは，それなりにしばしばあるような印象です。

◆　中には，学校で〔何について，どのように教えているか〕ということについて，小・中・高の違いもある程度前提にしたコメントもありますが（特支が視野にあるのは，それでもほとんどない印象です），ほとんどは一括りの「学校というイメージ」としての内実の乏しい言葉のように思われます。

◆　最近は接する機会が少なくなったように思いますが，コメンテイター類の人が「自分らの時代の日本史は，明治維新くらいまでしか習っていない」とのコメントに対してその場の多くの人が頷いて，自分は違うとの異論が出ることもまずないような場面もしばしばありました。近現代史を主に扱う科目「日本史A」が設けられたのが平成元年改訂の時であり，その頃も多くの高校で大学入試との関連もあり第二次大戦の頃までは教えていたように思います。もちろん中には，明治維新くらいまでしか授業で扱わなかった教員がいた可能性は充分ありますが・・。もっとも，当時，高校よりも学習指導要領の内容をきちんと扱う印象があった中学校社会の歴史的分野で日本史を相当程度に習っていると考えられるので，先の話題の真実味もそれほど高くは無いようにも思え，話題提供的な誇張の印象もあります。中学校の授業で習った日本の歴史と高校の授業で日本史を選択して習った内容との相違を明確に語れる人は多くいないだろうと思っています。

◆　こうしたコメンテイター類の人が学校教育についてコメントを述べる場面では，自分は学校教育を実際に受けてきた「体験者」なのだから自分の発言・発信にはリアリティがあると思っている感じがありますが，教育専門のコメンテイター類の人も含めて，丁寧に作り込まれた番組を除いて，発言に違和感を感じるのは何故なのだろうか？　と以前から感じていました。

《学校で学んだことを覚えているか？》

◆　私たちは小・中・高と過ごす中で主として教科の時間を通して多くのことを学んできていますが，多くの人は，その時々に学んだ内容について，どの程度覚えているものなのでしょうか・・？

〔C〕　その後に身に付けた知識・技能

高校までの段階の授業で習った領域を〔A〕とすると，多くの人は

授業内容に関連して，例えば，宿題・提出課題・試験勉強・

〔B〕　〔A〕に関連して自分で身に付けた知識・技能

塾などでの学習によって，深めたり拡げたり定着を図ったりして

〔B〕の領域を形成してきたと思われます。さらに，その後の大学

時代や職業時代を通して身に付けた関連する知識・技能に

〔A〕　小・中・高の授業で学んだ知識・技能

よって，〔C〕の領域，即ち現在の知識・技能が形成されている

ように思われます。

◆　私自身のことを例に考えてみると，まず根幹となりそうな〔A〕

の領域のことですら，それぞれの授業の断片的なことは幾つかの

場面の記憶として残ってはいますが，知識・技能自体については

どのことがらについて，どの段階で学んだのかは，むしろ，ほとんどについて〔明確には覚えていない〕というのが正確だろうと思います。ある程度の大きな位置付け，例えば，九九や筆算は小学校の時だったということや二次関数と二次方程式の関係などは高校で学んだという大きな概念的な位置付けはできるとしても，それより小さな概念・用語などになると，国語や理科・社会などの教科に関係なく，どこで，どのように学んだかを覚えているとは，まったくもって言えないと思っています。

◆　勿論，こうしたことをしっかりと覚えておられる方も普通に多くおられることとも思っています。が，私自身は，例えば生徒の名前を覚えるとか，出会ったことがある人の顔を覚えているとかは，「普通の教員」の人たちに比べて，どうも弱いのではないか・・と，ずっと思ってきていました。その一方で，幾つかの場面・シーンや図柄などについて覚えていることは，他の人たちと比べてそれほどの遜色は無いようにも思っていますが，言われてもまったく覚えていないことも多くあり，どのような場面・シーン・図柄などが記憶に残りやすいのか，要領を得ないのが正直なところです

◆　私自身は曖昧でぼんやりとした思い起こししかできませんが，小・中・高の発達段階に応じた知識・技能を身に付けることの重要さは格別に大事なことだと思っていますし，思考力・判断力・表現力に着目する授業の場面でも，知識・技能を身に付けることと一体的に組み立てることが必須だと思っています。視点的には，知識・技能を身に付けることをそれのみ単独で，ただ覚えることを優先させたり反復練習自体を目的とするような形態の学び方を脱皮して，目的性や全体像・プロセス・手立てなどと関連づけながら学びの幅を拡げたり深めたりするやり方にしていくことが大事なことだと思っています。

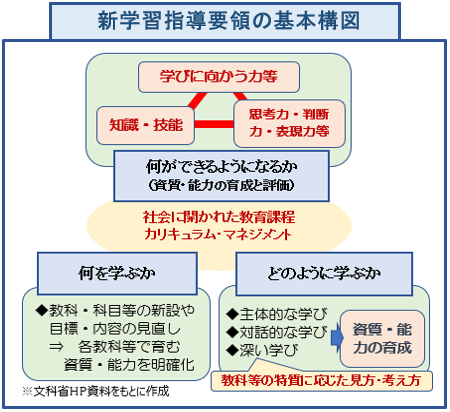
《学び方，見方・考え方》

◆　小・中・高の授業における学びには，知識・技能を身に付けることだけでなく，学び方を身に付けたり見方・考え方を身に付けたりする領域も，格別に大事なこととしてあると思っています。知識・技能は単独の機能・力として捉えても，それ自体に大きな意義がありますが，知識・技能の繋がりを意識したり，複数の知識・技能を連関させて一体的に機能させたり，他のことに活用・応用したりすることで，より大きな表現力・説明力になったり，しっかりした判断根拠になったりするものだと思っています。

◆　この「学び方，見方・考え方」の身に付け方についても，どこまでが学校の授業で身に付いたものか（図の〔A〕），それに関連した自分としての学びの営みの中で身に付いたものか（図の〔B〕）ということについても，自分のことを捉え直してみても判然としないのが正直なところだと思っています。

◆　正確な記憶ではないですが，授業の教材や自分で読んでいた本のある内容からそのことの「見方・考え方」が忽然とした姿として腑に落ちたり，ある先生や人物のちょっとした言葉から「見方・考え方」の視野が突然広がったりした経験があります。そうしたことは予定・計画してあることではなく，「突然的な気付き・思考」に属することのように思っていますが，こうしたことも「学び方，見方・考え方」に属することのように思います。

《授業の在り方》



◆　こうした「学びの受け手」の視点から自分自身

の小・中・高の「学びの経緯」について，時に振り

返って捉え直してみることは，もしかすると，授業

者の立場にいる教員にとっては意義のあることかも

知れません。そのことは自分の授業の「受け手」と

なる生徒を単にイメージしてみる以上に，「学びの

構図・仕組み」のようなことについて，より実感的

に捉えることに繋がる可能性があると思います。右

の図は，新学習指導要領の基本構図について

文科省のHP資料をもとに作成したものですが，

こうしたこれからの学びの捉え方の全体的なことや

個々の要素について，自分自身が小・中・高の

授業を受けてきた者として「学びの受け手」の視点

から捉えてみることも有意義なことだと思います。

《まとめ的に》

◆　自分としての根拠も乏しく，漠然とした整理になりますが，

　◎　小・中・高の学校での授業で習ったことは，直接的な知識・技能的なことは多くのことを忘れてしまっていて覚えてはい

ませんが，学びと成長の過程では，学ぶことや考えること自体，そして，考え方を工夫したり活用したりすることの「核」

や「種」のような要素を持っていると思われます。

　◎　知識・技能は，学び方や見方・考え方などと一体的に，段階的に身に付けていくこと，そして，そのことを自分自身

　　　が理解することで，現実社会に向き合う「捉える力・考える力・判断する力・表現する力など」に繋がると思われます。

◆　「学校で教えること」「学校で学ぶこと」には，授業以外の本人の学びの営みも一体的に連動していて，「学校での学

び」を表層的・イメージ言葉的に捉えるのは充分とは言えず，最初に話題にしたテレビでのコメンテイター類の人が学校教育についてコメントしている時の「学校で教えるべき・・！」についても，授業の在り方，学びの在り方（知識・技能の身に付け方だけでなく，学び方や見方・考え方についても）について，しっかりとした見識・洞察を踏まえたコメントとは言えないと思っていますし，ただ単に授業で扱えば良いという訳ではないと思っています。

◆　学校の授業で教えるべきことについては，まさに学習指導要領において内容・構図・考え方などが整理されている面と，実際に教員が個々の授業においてどのように教えるか・扱うかという面との接点は，「年間授業計画・評価計画」であり，それに基づく「単元授業計画・評価計画」だと思っています。生徒の学びを促し，「深い学び」に繋がる授業の組み立て・準備をしっかりと行って，プロとしての自信を持って授業に臨んでいただきたいと願っています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（令和2年12月６日）